

## 富山県八尾地域の新第三系の花粉群集

○齊藤 毅（名城大学理工学部環境創造学科）・黒部和彦・安田考顕（元名城大学理工学部環境創造学科学生）・王偉銘（中国科学院南京地質古生物研究所）・中川登美雄（福井県立丸岡高等学校城東分校）

富山県八尾地域には新第三系が広く分布し、これまで多くの地質学および古生物学的研究がなされている。花粉化石については、山野井・津田（1986）が中部中新統黒瀬谷層の花粉群集の研究を行い、マングローブ植物花粉を含む温暖な気候を示す花粉群集を明らかにしている。しかしながら、ほかの地層群の花粉群集に関してはこれまでまったく明らかになっていないので、黒瀬谷層も含め、八尾地域の新第三系全体の花粉群集を明らかにすることを目的に本研究を行った。

八尾地域は下・中部中新統の八尾層群と中部中新統～更新統の砺波層群からなる。八尾層群は下位より楡原層、岩稻層、医王山層、黒瀬谷層、東別所層からなり、黒瀬谷層と東別所層から花粉化石を産出した。砺波層群は天狗山層、音川層、三田層からなり、すべての地層から花粉化石を産出した。

各層からの花粉群集の特徴を記す。

黒瀬谷層：常緑型 *Quercus*, *Liquidambar*, *Carya* を全般に高率に産出する。中位の層準にマングローブ植物である *Florschuetzia*, *Bruguiera*, *Rhizophora* を含む層準が含まれる。

東別所層：常緑型 *Quercus*, 落葉型 *Quercus*, マツ科花粉を高率に産出する。*Liquidambar* の産出率が下位の黒瀬谷層に比べて減少する。

天狗山層：常緑型 *Quercus*, *Liquidambar*, *Fagus* を高率に産出する。

音川層：下部と上部で群集が異なる。下部は *Fagus*, 落葉型 *Quercus*, *Carya* などを高率に産出し、常緑型 *Quercus* が上位に向かって急減する。上部は *Fagus* が優占するようになり、*Carya* の産出率が下部に比べて急減する。

三田層：音川層上部の群集と類似し、*Fagus*, 落葉型 *Quercus* などを高率に産出する。最上部で *Taxodiaceae* の高率な産出もみられる。

山野井（1998）の花粉帯と比較すると、黒瀬谷層と東別所層の花粉群集は NP-2 帯（18.5-13Ma）、天狗山層と音川層下部の花粉群集は NP-3 帯（13-6.5 Ma）、音川層上部および三田層の花粉群集は NP-4 帯（6.5-4 Ma）～NP-5 帯（4-2.5 Ma）に相当する。これまで海棲微化石の産出がなく年代の不確定であった天狗山層の年代がある程度限定された。また、不整合が挟まるものの、この地域は新第三紀における約 16Ma の最温暖期から第四紀付近にいたる花粉群集の変遷を、一地域で追跡できる場所であることが明らかになった。